

人と自然の博物館 ハーバリウムからの拾い書き (1)

——新分布情報など——

橋本光政*

県立人と自然の博物館は平成4年10月、本格的なハーバリウムを持った博物館として発足した。これはさかのほれば兵庫県生物学会の強い要請や県会への設立請願等の長い運動の成果といえる。私もその請願に賛同した一人であるが、好運なことに、その自然系博物館準備室、引き続いて県立人と自然の博物館に勤務することとなった。準備室の頃から生物学会や、会員の方々にはことのほかお世話になった。設立準備や開館直後の繁忙もようやく落ちつき、私の仕事も標本を扱うハーバリウム業務が多くの比率を占めるようになってきた。有り難いことに一般県民や生物学会の会員の方からの標本の提供も多い。遅ればせながら、博物館としての機能が発揮されはじめた現在、まだまだ、資料不足ではあるが、そのハーバリウム情報の一つでも生物学会へ提供することは私の義務とも考える。開館準備中や、そのオープン後の雑用に追われてその機会をつくりかねていたが、ささやかな知見かも知れないが、少しづつ気づいた点を書き記してみたいと考えている。

1) シデシャジン (図1)

Asyneuma japonicum (Miq.) Briq. (Campanulaceae ; キキョウ科)

兵庫県立人と自然の博物館には細見末雄先生からの寄贈標本を納めている。その全てを確認した訳ではないが、標本の整理をしつつ気づいた標本の一つがシデシャジンである。本種は石灰岩などの塩基性岩地などに見られる特殊な草本植物で、兵庫県植物目録には〔丹波〕城北(平成4年10月丹波自然友の会で出版された『丹波草木誌』には詳しくデータが記録されており、細見先生の記録であったと推測できた)とあるものの、やや疑問に思っていた。ところが3年前寄贈された標本の中に本種を見て、かつては兵庫県にも自生していたのかと驚いたしだいである。

花冠は細く切れ込み、同じ仲間のソバナやツリガネニンジンの花冠とは一見してその違いを認識できる。7~8月、茎頂と上部の葉腋に総状花序を着ける。花柄は短く、1~3mm。萼筒は短く、裂片は線形、全縁で長さ4

~6mm。花冠は青紫色で、基部まで5裂し、裂片は線形で長さ10~15mm、幅1~2mm、平開し先は反り返る。雄蕊は5個あり、花糸は短く、下部には毛がある。葯は線形で反り返る。花柱は花冠裂片とほぼ同長であるが、花冠裂片が反り返るので、長く突き出ている感じになる。

平凡社の日本の野生植物では、その分布は本州、九州：朝鮮、中国(東北)、アムール、ウスリーに分布するとある。和名は四手沙参の意味で花冠裂片が神前に供える紙の四手に例えたものである。採集記録は篠山町高城山、採集者は細見末雄；採集日は1975年10月19日、標本番号はNo.15921である。私の採集歴はまだまだ浅いが、山口県での採集経験を一回だけ持っている。当ハーバリウムでは、兵庫県産の標本はまだこの細見先生の標本だけである。他府県産は2点あり、岩手県産、Satomi, No.23441と滋賀県産、S. Asida, No.8031である。



図1 シデシャジン

2) クワガタソウ (図2)

Veronica miqueliana Nakai (Scrophulariaceae ; ゴマノハグサ科)

私の大学4年生の卒業論文は4人の共同研究で、富山県の庄川と岐阜県の長良川の分水嶺を境として、高等植物の分布比較をすることであった。修士論文は石川、福井、岐阜の3県にまたがる白山のフロラの解析であった。その修論の資料収集のため、白山へは20数回の採集登山を行なった。兵庫県に勤めてからもその採集旅行は毎

* 兵庫県立人と自然の博物館



図2 クワガタソウ

年のように続き、登山回数は延べにして40回近くとなり、白山での滞在日数も百数十日となった。その白山の採集で、亜高山帯から高山帯にかけての草原や崩壊地周辺の草地に、背丈の低いヒメクワガタを何度か採集した。そのヒメクワガタが生育するハビタットは、白山山系の中でも傾斜が強く水分補給がなされにくい、そして絶えず土砂の流出や搬入によって変化する様なやや特異な地域であった。従って、その生育地周辺には白山でも比較的稀な植物の分布することが多く、同種を採集する度に何かの珍種の採集を期待したものである。

項目のクワガタソウは、贈られてきた包を開けたとき、中から最初に現れたものである。と同時に前述のような過去の思いが頭の中を錯綜し、次ぎに登場する標本の期待で胸が高鳴ったものである。その期待は裏切られず、たいへん貴重な標本が次々に現れた。クワガタソウは県下では初めての採集記録である。今まで知られている分布域は東北地方南部から関東、中部地方、紀伊半島に知られている。

それはともかくとして、本種の採集者は佐用郡、宍粟郡を自分のフィールドとした、鋭い観察眼の持ち主の井口武一先生である。以前、私が博物館に勤務する前、兵庫県植物誌研究会を発足させたとき、やはり貴重な植物の分布情報を与えていただいていた。その標本の採集地は宍粟郡山崎町上ノ上河原山国有林；採集日は1992年6月27日；博物館資料番号C1-069120である。標本は果実をつけ、根株もきちんと残された立派な標本である。

3) ホザキノヤドリギ (図3)

Hyphear tanakae (Franch. et Sav.) Hosokawa
(Loranthaceae; ヤドリギ科)

小林拓郎先生は西脇の自然を守る会の会長さんである。その活動は広く、行動半径も西脇市内だけでもち

ろんない。県下全域を広く歩かれてもいる。そして、植物の写真撮影に関しても高い技術を駆使されている。

第45回全国植樹祭が本年村岡町で開催される。その植樹祭を記念しての『兵庫の樹木誌』の出版が計画され、1992年その原稿作成と編集を引き受けた。生物学会で活躍している先生方や、自然の写真撮影に長年の経験を持つ方々の協力を得て、目下最後の編集作業に追い込みをかけている。

小林先生には、一昨年、昨年(1992, 1993年)の2年間、樹木の写真収集やその検討に特別お世話になった。わずか2年間では、県下の野生樹木の写真を全て揃えることは到底無理である。それを少しでも補うため、2年間で撮影できなかったスライドは、それまでに撮影されていた写真の中からも提供していただいた。

その渦中のことであった。電話での話の中ではあるが、本種を見つけ、写真を撮影するとともに、標本も採ったとのことであった。その後、博物館で、スライド写真の検討会をしたが、標本を確認するまでは、素直に信じきれないほど大きなショックを受けた。と言うのは、本種は中部地方以北にしか分布が知られていない代物である。もちろん、何十回か歩き回った白山でも見たこともなければ、記録に出会ったこともなかった。

秋も深まり、果実が熟する頃になると、再びその思いが再発した。標本が花の時期であったので、果実の確認と標本が採りたくて、小林先生に詳しい地理説明をうかがうことになった。実物写真を撮った後、周辺を捜せばそのほかにもあるに違いないと思い、同じ寄主を捜しまわった。しかし、すでに枯れている株は2本見つかったが、他には見つけることはできなかった。

最後に当博物館の収蔵庫に入った標本のデータを記録しておこう。採集地は村岡町鉢伏山；花の標本の採集者は小林拓郎；採集日1993年6月27日；博物館資料番号C1-069126。及び、果実の標本、採集者橋本光政；採集日1993年10月25日；標本番号No.21163である。



図3 ホザキノヤドリギ

4) ツゲモチ (図4)

Ilex goshiensis Hayata (Lauraceae; モチノキ科)

本州 (紀伊半島), 四国, 九州, 琉球の常緑樹林内に生え, 台湾にも分布する。

本種の分布域には兵庫県は含まれていない。当然県下での採集記録はない。

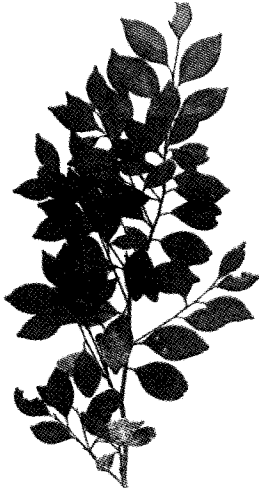


図4 ツゲモチ

本題のツゲモチの発見はまったくの偶然であった。樹木誌の写真収集が順調に進んで、8割近くが集まっていた。しかし、県下では淡路にしか分布しない樹木の多くが欠けていた。『淡路島の植物誌』を書き上げた小林禧樹さんにバクチノキ、カンザブロウノキ、ヤマビワなどの自生地を確かめ、それらの花や果実の撮影を目的に洲本市鮎屋の「鮎屋の滝」へ入ったのは、1993年10月のことであった。スダジイ、ヤマモモ、ヒメユズリハの高木を主体とした照葉樹林が残っている。ヒメユズリハ、ナナミノキなどの果実が、未熟だが多くの実をつけていた。それぞれの小枝を高枝切りで採集した後、森林の奥へと入っていった。各樹木の種類を確認しつつ、双眼鏡でも果実や花の有無を捜し求めた。ところが、1本得体の知れない樹木がある。花も実もつけていない。県下では見たことのない樹であることは間違いない。ステライルな標本ではあるが、念入りに標本とし、樹肌の写真を撮った。胸高直径15cm、樹高8mとメモに書き留めてもよかった。それが、本項目のツゲモチである。

ツゲモチとわかるとその花期と果期が気になり一か月を待たずに、再び同地を訪れることとなった。しかし、いくら捜しても果実はなかった。残念ではあるが、雄の樹としか判断しようがなかった。また、周辺に同種の樹を求めたが、これも最初の発見個体以外は見つけることはできなかった。

兵庫県の環境管理課は、その自然状況に応じて、自然環境保全地域、環境緑地保全地域、自然海浜保全地域、郷土記念物などを指定して、保全を図っている。去る平成6年の1月15日、それらの諮問機関である自然環境保全審議会 (小林桂助会長) が環境緑地保全地域の1993年度の指定として、当地の「鮎屋の森」を答申した報道があったが、その報道にも一番にこのツゲモチが記されていたことをご記憶の方がいるかも知れない。

本種の特徴は押し葉標本にすると、その葉が灰褐色に変色し生葉とはまったく異質の感じになってしまう。葉身は革質、楕円形または広楕円形、長さ2~5cm、幅1.5~3cm。先は短くがって先端は鈍く、基部は鋭形で葉柄に流れ、鋸歯はなく、両面無毛。5月、前年の枝の葉腋から出たごく短い短枝に花をつける。雌雄異株。雄花序は短枝に長さ2~5mmの3~10本の花序軸を束生し、その先に散形状に1~5個の花をつける。雌花序はやはり短枝に3~6個の花を束生する。萼片は卵円形、花弁は広楕円形で白色、長さ1.5~2mm。果実は球形で径約5mm。赤熟し4個の種子を持つ。

本県でも、当博物館でも初めての標本である。標本は花も果実もついていないが、その標本データは採集地洲本市鮎屋;採集者橋本光政;採集日1993年10月10日;標本番号No.21162である。

5) シオジ (図5)

Fraxinus platypoda Oliv. (Oleaceae; モクセイ科)

安栗郡山崎町上ノ上。その奥には岩上神社がある。その社叢林及びその周辺と、その前を流れる溪流は何回採集に入っても面白い地域である。その第1は樹冠を見上げるだけでも首が痛くなってしまっすぐに伸びた高木群が聳えることである。その構成種の一つであるシオジは以前から同種とは推測していたが、一度もその標本や、分類のキイとなる花や果実を採集したことがなかった。採集したくても、それなりの準備をしていかないと、不可能であったからである。樹木誌の中で、樹木目録に種名を入れるには証拠となる確実な標本が欲しかった。



図5 シオジ

昨年(1993年)の入山はただ一つ、その高木の種名の判明を目的としていた。車のトランクの中には、採集用具として長さ9mの竿と、それをさらに延長することのできる2mの継ぎ竿を積んでいた。小雨の降る、悪天候ではあったが、果実の着いた小枝を採集できた。それは、今まで採集してきた同属の *Fraxinus* の果実とはまったく異なっていた。果実は大きく、図鑑や写真で判断つきかねていた不明解さが、その果実を一見することにより全て解決できた。最近県下で明らかに確認できたシオジはこの河畔をおいてない。昭和の初期には波賀町の音水溪谷や赤西溪谷の溪谷沿いには、シオジの高木が多く林立していたと聞く。後述の『田代善太郎日記』には1931年8月17日の赤西溪谷での記録に「実をつけたるがあり」とある。しかし、花や果実のついた標本は1点として見たことがなかった。

その第2は、周辺の植物の豊富さである。草本では巨大なタイミンガサ、県下でも西西播にしかその生育を知らないサワリソウ、花糸が長く垂れ下がり他に類例の無い花形を持ったヤマトグサなど、早春から晩秋まで、自然探訪の興味はつきない。やや心配なのはそれらの生育地に接してキャンプ場が設けられ、一部では河畔の杉林の中までテント設営の跡が見られることである。自然教育の必要性が叫ばれ、その施設の増設や、休日の増加にともなうレジャーランドの増設などは県下でも各地で計画されている。それは既設の神社や村はずれの自然林の良く残された群落に接して設営されることが多い。近くに観察によい社叢林や自然群落があるからといって、安易に施設をつくってもらっては困る。先祖が代々残してくれた、貴重な植物資源を1代や、2代で失うことになってしまう。

現在当博物館のハーバリウムに入っている標本は上記岩上神社の標本のみである。採集者橋本光政;採集日1993年7月4日;標本番号No.20952とNo.20253である。

6) アスヒカズラ (図6)

Lycopodium Complanatum L. (Lycopodiaceae; ヒカゲノカズラ科)

県下産のアスヒカズラの標本が当博物館の収蔵庫に入ったのは次の標本が初めてである。その採集地は宍粟郡千種町河内;採集者は池田数生;採集日は1992年6月2日;博物館資料番号C1-069118;県下での今までの記録は兵庫県植物目録に丹波の小金ケ岳がある。

佐用郡の植物を熟知の内海先生のところに届けられた標本である。孢子嚢穂はないが、直立茎は小枝とともに扁平で、葉とともに幅3~4mm。表面は緑色で裏面は淡緑色、節がはっきりしている。葉は鮮緑色で4列に並び、下部の半分以上が茎と合着し、先端は刺状となっている。



図6 アスヒカズラ

背葉は線形で圧着、側葉は幅広く、開出するか内曲する。腹葉は小さく、鋭尖頭の先端部以外は茎に圧着している。孢子嚢穂は3~10cmの柄が伸び、その先に1~5個が着く。円柱形で、長さ1~3cm、径2~4mmとなる。

最近出版された平凡社の『日本の野生植物(シダ)』ではその分布は北海道、本州(中部地方以北のほか、滋賀、兵庫、鳥取各県の限られた場所)、四国の徳島県で日当たりの良い山地に生じ、北半球に広く分布するとある。また、誠文堂新光社の『新日本植物誌シダ篇』には岡山県以北、四国(徳島県)とある。東京大学出版会から出版されている『日本のシダ植物図鑑』を見ると、兵庫県の小金ケ岳の標本は1956年波多野啓二採集の標本で京都大学に収蔵されていることがわかる。また、滋賀県の標本は中禅寺山(1934)(京大)、鳥取県産は朝鍋鷲山(1971)(国立科学博物館)、徳島県産は丸笹山(1957)(国立科学博物館)で採集されたとわかる。

7) ユウゲシヨウ (図7)

Oenothera rosea Ait. (Onagraceae; アカバナ科)

多年草。茎は東生し高さ20~40cm、短い白色の伏毛が多い。根生葉は倒皮針形またはへら形。円頭から鈍頭、しばしば羽状に中~深裂。茎上の葉は皮針形~長楕円形、鈍頭、縁には波状の浅い鋸歯がまばらにあって、葉面は波を打つ。花は葉腋に単生、径1~1.5cm、子房下位。萼は4個、淡色、膜質。花卉は4個で、円頭、倒卵形、淡紅色で紅色の脈が目だつ。雄蕊8個、葯は白色。雌蕊は1個、先は深く4裂する(長田武正著;日本帰化植物図鑑)。最初、検索表では中部地方以北のエゾアカバナかと思われたほどアカバナ属に似ている。

同著のノートには、北米原産で、明治時代より鑑賞用として栽培されたというが、今では見られず、態本、福

岡，兵庫，静岡，埼玉，千葉の各県に帰化しているとある。兵庫県立昆虫館の内海功一先生から送っていただいた標本にこれが含まれていた。先生も普通のアカバナでないことに気づかれて送られたものである。

県下には長年県下の植物を観察し，もちろん県外の植物にも接する機会を持ちながら鋭い観察眼を養っておられる先輩の方々が多い。それだけに，提供していただく標本や，情報には楽しみが多い。採集地は宍粟郡千種町西山，採集日は1993年9月21日，採集者は内海功一；博物館の資料番号C1-069121；標本は花をつけたきれいな標本である。当博物館には他県を含めてはじめての標本である。



図7 ユウゲショウ

8) イワウメヅル (図8)

Celastrus flagellaris Rupr. (Celastraceae; ニシキギ科)

和田山在住であった，故人田口美智太郎さんを御存知の方は，現在ほとんど無くなってしまった。その田口さんの名前がしばしば登場するのは『田代善太郎日記』である。

『田代善太郎日記』とは元京都大学理学部植物分類学教室に在職された先生の日記である。それは採集記録などの植物学的に貴重な日記を，そのご子息(田代晃二氏)が整理して学術的にまとめられた大冊である。私はその日記が出版された後，機会があって東京に出張した際，東京大学の正門前の古書店で4冊ものを買込み，重さも忘れて持ち帰ったことがある。また，甲南大学の教授をされていたご子息から，直接お葉書を頂きびっくりした覚えが蘇ってくる。それは，私がNHKに頼まれて「自然とともに」という番組に出た直後であった。約18分間，宍粟郡の3カ所を舞台に植物の話を中心に生態系や自然のサイクルの話，記者の質問に答えつつ独演した番組

であった。その中で，田代善太郎先生の採集と兵庫県の植物相に関するご貢献をお話させていただいていた。一介の生物教師であった私の話であるが，大学教授のご子息がそれを聞かれ，父が兵庫県の植物相の解明にそんなにお役にたつて，現在でも話題にさせていただいたと，喜んでお葉書をしたためて下さったものである。それは，その当時私が勤めていた姫路西高校に，その放送の記念に『田代善太郎日記』を寄付したいとの内容であった。当然のことであるが，校長にも話し，喜んで贈っていただき，お葉書とともに現在も姫路西高の図書館に納めている。

昭和の初期，その日記の中に登場する，当時兵庫県在住の植物採集家や研究者は多い。細見末雄，室井綽，樋口繁一，松山確郎，建部恵潤先生をはじめ，故人となられている阿部良平(兵庫県博物学会の創設)，山鳥吉



図8 イワウメヅル

五郎(兵庫県中等教育博物学会の創設，六甲山の植物の著者)，川崎正悦，稲田又男(兵庫県シダ植物誌の著者)，川中菊市(朝来郡植物誌の著者)，井上三義(分布詳説；兵庫県の生物の著者)などの各氏とともに頻繁に登場するのが田口美智太郎氏の名前である。田口氏は「但馬の植物目録」(昭和12年出版)を作ろうとしている方として，その採集物の鑑定にしばしば田代先生が足を運ばれている。

前置きが長くなったが，その田口美智太郎氏の標本が地元の和田山商業高校に残っていた。田口氏が亡くなってから久しいが，それを知ったときはよくぞ残されたものと感激した次第である。というのは，今でも地元の新宮町や県下の古い植物研究者を知る者にとっては，明治の日本の三大偉人の一人として，牧野富太郎，南方熊

楠と並べて、大上宇市の名前を挙げることがある。当然のことながら、その勉強や研究に用いた写本の数々や、牧野、南方両氏などの書簡など貴重な資料がたくさんあったという。もちろん、多くの標本も山のようにあったと聞く。ところが、寄贈された写本や書簡は雨水さえ防げば残ったが、標本は同様の管理では虫の餌食となってしまう、日の目を見ぬ間に行方しれずになってしまった、と聞いていたからである。

田口氏の標本も一歩間違えば同様の運命をたどっていた。管理に困り、処分して良いかとの相談が行ったのは、豊岡の元和山田商高に勤めていた上田尚志氏のところであった。彼はまだまだ若い生物担当の教師であったが、昆虫類を研究対象としていた。分野こそ異なれ、研究資料の大切さを知っていた彼は”田口氏とはどんな人でその標本価値もわからないが”と連絡くれたのは設立準備室の頃である。急いで田口氏の遺族を捜し、標本の受取手続きへと走ったことはいうまでもない。

その標本の中に、標題のイワウメヅルがある。採集地は大屋町の天滝、採集日は1959年6月4日である。花も果実もない標本であるが、県下はもとより私の採集歴の中では一度も姿を見せてくれなかった稀産種である。

その特徴の第1は枝に円形ないし楕円形の葉柄痕が明瞭で、托葉は少なくとも、一、二年枝には一対の刺となって宿存する。今年枝は黄緑色、前年枝は暗紫色、ともに微細な乳頭状突起を密生するが、三年枝より古い枝では次第に灰色平滑となり、ときには節から太く短い気根を出して木や石の上を這い上がる。葉身は薄く、円形ないし長楕円形、長さ2~5cm、幅1.5~4cm。基部は浅心形からくさび形、先は急鋭頭から急鋭尖頭、縁に芒状の細鋸歯がある。表面は無毛、裏面の脈上に多少とも突起状の硬い毛がある。葉柄は1~5cm。雌雄異株の籐本。花期は5~6月。花は雌花が1~3個、雌花は1個ずつ葉腋ときに芽鱗のわきに生じる。朔果は球形、径約6mm、黄熟し、宿存する花柱をつける。仮種皮は橙赤色。関東以西の本州と四国、九州、朝鮮、中国東北、アムールに分布する。

当博物館の収蔵庫には他に2点が入っていた。その1点は矢内正弘氏の採集品で、採集地は福崎町甘地、採集日は1992年7月12日、標本番号No.13760である。他の1点は同定間違いでツルウメドキであった。『兵庫の植物』(1991)に書写山の植物目録として発表されているので、その採集者と標本番号を記しておく；芳澤俊之氏の書写山産のNo.11873である。目録づくりのために京都大学の標本なども参考にした彼であったが、稀産品であるだけに検討落ちであったのであろう。兵庫県植物目録には何か所かの記録があるが、証拠標本がないのでその確認はできない。

9) キヨスミウツボ (図9・10)

Phacellanthus tubiflorus Sieb. et Zucc. (Orobanchaceae; ハマウツボ科)

私が当博物館準備室に入って1年目の1990年夏の新聞の切り抜きがある。神戸市在住の薬師神千江子さんと佐々木修さんが六甲山のハイキング中に見つけ、神戸新聞社に持ち込まれたのが、このキヨスミウツボであった。その年は、その後小林禱樹氏の発見で、日本一の群生地と太鼓判を押された神戸市西区木見や、中野剛氏の明神山での確認など本種の情報が多かった年であった。目下、木見の群生地は保存対策を前提に調査が進行している。葉緑素を持たない本種は、その根が生きた樹木の根に寄生して養分を得ている。その生態を植物画にして記録したいと思い、松帆真知子さんにB4サイズの画に描いてもらった。その根は確かに樹木の細い根につながっていたという。それは、標本とともに植物画として博物館に保存している。また、企画展「植物画が語る兵庫」(1994年2月15日~同年4月10日)のテーマのもと、県民の方々にも観ていただく計画を進めている。図10は、その後別の株を描いてもらった線画である。

また、図9のコピーは内海先生から送っていただいた標本である。その採集地は宍粟郡波賀町水ノ山；海拔1300m；採集者梅原賢三(山崎小学校生)；採集日1992年7月31日；博物館資料番号C1-069119；花の満開時の標本である。花筒が非常に長く、できればその形態の確認のため、機会をつくって自生地を調査したいものと考えている。

本種は普通、山地の木陰に生え、カシ類、アジサイ類などの木の根に寄生する。全体肉質で白色だが、後に黄色を帯びる。茎はやや太く、高さ5~10cm。花は5~6月頃開き、白色で長さ2.5~3cm。北海道~九州、朝鮮、ウスリー、樺太、中国に分布する。和名の由来は千葉県清澄山で採集され、花がウツボグサに似ているのでいう。



図9 キヨスミウツボ (水の山産)

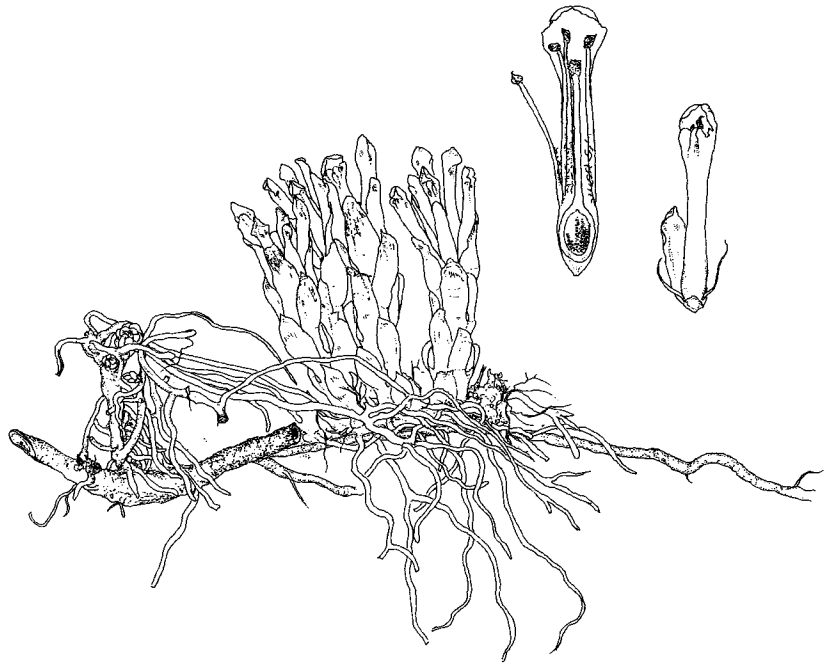


図10 キヨスミウツボ (神戸市木見産)

神戸新聞 (1990年6月10日朝刊)

梅雨だけに咲くキヨスミウツボ

六甲山で 神秘の 白い花 発見

梅雨の時期だけに見られる
珍しい寄生植物キヨスミウツボ
を神戸・六甲山中でハカ
1が見つけた。六甲山域では
初めての発見で、県下でも数
例目。深い自然林にだけ育つ
神秘的な白い花とあって、六
甲の自然がよみがえって来
証拠」と専門家らを喜ばせて
いる。

発見したのは、「いじい山
岳会」メンバーの薬師神千江
子さん(富志)と佐々木修さん
(三田)ともに神戸市灘区在住。



西六甲の山中で見つかった寄生植物キヨスミウツボ

神戸の 県下で 教諭ら 数例目

今月中旬、アラカシな暖
地性の常緑樹が茂る山中の地
表に、長さ数センチメートル
のよつな白っぽい奇妙な花が
点状しているのを見つけた。
元中学校の理科教諭で、長年
山歩きをしている佐々木さん
も初めて見る植物で、一部を
持ち帰り、同会のメンバーで
植物に詳しい森田俊雄さん
と川岡中央校在任の川岡調
べでもらった。この「珍
しいキヨスミウツボ」は、その
返事。最終的に県自然史博物
館設立準備室の橋本光政さん
が鑑定。同種に間違いないこ
とが分かった。

橋本さんによると、キヨス
ミウツボは全国的にも珍し
く、昨年、西播磨で見つかった
が、県下では長い間、幻の
植物となっていた。

今回の発見場所は、幸いめ
ったにハカ1が足を踏み入
れない地域だけに、同種調査
でも現地写真撮影するにあ
たり、継続調査を進めること
している。

キヨスミウツボ シブキ科 葉

分布するハマツボ科の多年
草。木の根に寄生した植物に
寄生し、梅雨の時期に乳白色
の花を咲かせ、干葉裏の清
澄山で最初に発見され、花の
形が矢を入れるつぼに似て
いることから付けられた。

参考文献

紅谷進二. 1971. 兵庫県植物目録. 六月社
細見末雄. 1992. 丹波草本誌. 丹波友の会
田代晃二. 1973. 田代善太郎日記(昭和篇). 創元社
小林禎樹. 1992. 淡路島の植物誌. 自然環境研究所

佐竹, 大井他. 1990~1991. 日本の野生植物. 平凡社
岩槻邦男. 1992. 日本の野生植物シダ. 平凡社
中池敏之. 1992. 新日本植物誌シダ篇. 至文堂
倉田・中池. 日本のシダ植物図鑑(6). 1990. 東大出版会
長田武正. 1972. 日本帰化植物図鑑. 北隆館